

“ポスト団塊世代”の林住期

古来、インドには、人生を4つの時期に分ける“四住期”の思想がある。将来のために学ぶ「学生期」、家族や人のために働く「家住期」、家を出て森林に住む「林住期」、解脱を求めて独り巡り歩く「遊行期」の4つである。作家の五木寛之氏は著書のなかで、学生期を25歳まで、家住期を50歳まで、林住期を75歳まで、その後を遊行期と分けし、50歳を明確な区切りとして、その後の25年間の林住期を人生の黄金期として生きるべきだと説いている。50歳になったら仕事から離れ、人生を生活のためだけでなく生きること、自分が本来なすべきことは何か、自分が本当にやりたいことは何かということを大切にして、他人や組織のためでなく、ただ自分のために残された時間を過ごすことを勧めるのである。（『林住期』2007年2月、幻冬社刊）

林住期に入りかけた筆者のような“ポスト団塊世代”は、いまひとつ影が薄い存在である。すなわちわれわれの世代には、戦中戦後を生き抜いていまは遊行期にある世代や、高度経済成長を懸命に支え、いままさに林住期の真ただ中にある団塊世代のような、世代として際立った特徴がない。

団塊世代の人々は、企業戦士として高度経済成長期を走り抜き、バブル崩壊で挫折を味わい、失われた10年を耐え忍んで、ようやく回復の兆しが見えかけたところで会社を引退する時期を迎えた。家住期には目いっぱい働

いて会社を支え、気がついたら60歳を迎えていて、すでに林住期の半ばに入っていたというわけである。そして「あとはよろしく」と会社のことはわれわれに預け、失ったものを取り返すかのように、自らの豊かな第二の人生を築くべく、趣味や旅行、勉強やボランティアなど、自分探しに熱心に取り組んでいる。何をやるにも熱心で一所懸命なのが団塊世代の特徴なのだ。

この調子だと、われわれの世代が定年退職を迎える頃には、団塊世代の先輩たちが、年金生活、医療・介護、社会参加、趣味、自己実現、資産運用など、第二の人生の枠組みをすっかり整えてくれていることだろう。

それに比べて“ポスト団塊世代”は、団塊世代が道無き道をブルドーザーのごとく切り開いた後をついていって、平坦にしてもらった道を舗装してきたような世代である。会社に入ったときには、すでに会社や社会の仕組みは大方出来上がっていて、われわれはそれを維持・改良することに今日まで努めてきた。だから、未開の大地を開拓するといった、先駆者的な経験は少ない。

情報システムの世界でも、われわれが就職した頃には、中核となる業務にはすでにコンピュータが導入されており、システム化の初期段階における目覚ましい自動化は一段落していた。その後も、投資効果の小さい業務にまで次第にシステム化の枝葉を広げていき、膨



大な既存システム資産が積み上がる結果になっている。そして、創成期からシステムに携わってきて全体の構造がわかっている団塊世代のシステムエンジニア（SE）が引退する時期を迎えて、“2007年問題”と称される、システムの安定的な維持が不安視される状況になっているのである。

多くの企業で、団塊世代は失われた10年のツケを払いきらないうちに引退していく。システムの世界でも、多くの不良システム資産が残ったまま、団塊世代のSEは去っていくのである。

かくして“ポスト団塊世代”は、団塊世代の残した玉石混交の遺産を、少なくなった人数で必死に支えつつ、残りの会社人生を過ごすことになるのだろうか。

しかし、それではつまらない。われわれは、団塊世代のように定年退職を待つことなく、50歳代から正味の林住期人生を始めようではないか。そのためには、団塊世代が残した資産をいったん整理して、捨てるべきものは捨てて身軽になる必要がある。「大量生産・大量消費に頼って成長を継続する」「仮想敵を作って結束を固める」「つねに他に一步先んじる」といった頑張りが、企業の、そして日本の成長を支えてきたのは事実である。しかしその一方で、過剰な資産や過剰な仕組みが自己増殖して、いまとなつては次の世代の重荷になっているものも少なくない。

もはや顧客や社会に対して価値を産まなくなった資産は捨て、過剰な競争や防衛は控えめにし、それぞれが同じようにもっていなくともよいものは分かち合うことにして、資産の総量を減らし、シンプルで、省エネ・省資源で、余計な人手がかからない仕組みにしなければならない。

われわれ“ポスト団塊世代”は、学生の頃からよく「無気力・無関心・無責任」と言われてきた。しかしそんなことはない。われわれだって自分が興味があることには熱心だし、自分のことには自分で責任をもつ。ただ団塊世代の先輩たちに比べると、ハングリーさに欠ける分だけやや淡泊で、人数が少ない分だけ群れたがらずマイペースなだけである。

そして、こうしたクールで自分らしさを大事にする“ポスト団塊世代”の気質は、林住期のライフスタイルにマッチしているのである。われわれは、とくに意識しなくとも、自分なりの興味や関心を大事にして行動するし、会社や家族のためだけでなく、自分のためにやりたいことをやって生きることには抵抗感がない。

前の世代から引き継いだ資産を再整理して上手に活用し、次の世代へつないでいくことさえできるなら、あとはこれからの長い林住期を人生の真の黄金期にすべく、自分の新たな居場所を創ることにじっくり取り組んでもよいのではないだろうか。 ■